

ポーランド日本学国際合宿における 学生の主体度についての一考察

ジョンデクなぎさ (アダム・ミツキエヴィチ大学)
nagisa@amu.edu.pl

【要約】

ポーランドにおいて毎年開催される「日本学国際合宿」は、学生が他機関の教師の講義・日本語の授業・ワークショップに受動的に参加するのみならず、自ら事業・授業を企画・実施することにより、主体性・社会性を身につける貴重な機会である。本稿は、先行研究、及び主に筆者がかかわった 2011 年と 2025 年の合宿の授業に基づき、当事業が当初の教師主体からどの程度学生主体に移行しつつあり、今後の課題は何かを検討する。

1. はじめに

ポーランドにおいて、2009 年から毎年 4 月または 5 月に開催されている「日本学国際合宿」は、学生が普段接することのない教師の講義・日本語の授業・ワークショップ等に参加する機会であるのみならず、学生が自ら事業や授業を企画・実施することにより、主体性と社会性を身につける貴重な場として注目される。本稿は、先行研究、過去の合宿についての参加教師へのインタビュー、筆者が参加した 2011 年と 2025 年の合宿での体験及び筆者がかかわった授業に基づき、日本学国際合宿が当初の教師主体からどの程度学生主体に移行しつつあるかを検討し、今後の課題を考察するものである。

2. ポーランド、日本学国際合宿のあゆみ

2009 年、クラクフ、ヤギエロン大学の教師が中心になり、ポーランドにおける日本学国際合宿（内外 5 大学が参加）がはじめて開催された。当事者であった瓜生他によると、その目的は

- ①日本学科の学生に日本学の様々な分野の専門家の講義を聞く機会を提供する。
- ②異なる国／機関の学生がともに学び情報交換することで親睦を深め、今後の学習への意欲を高める。
- ③日本学科間の国を超えたネットワーク作りを進める。（瓜生 2010, p. 158）

ことにあったという。さらに、日本語教師の実習の機会としての可能性も示唆された。（瓜生 2010, p. 162）学生の主体性に関して言えば、「学生へは学生係を通じて、逐次連絡、必要な指示を出した」（瓜生 2010, p. 160）とあることから、学生はどちらかという受動的な立場にあったことが窺われる。

瓜生の後任として国際交流基金からクラクフに派遣された日本語専門家の田中によると、当初から運営にかかわった教師らは日本学国際合宿を隔年で行うのが良いと考えていたが、学生側から毎年開催を望む声が強く、「学生たち自身で実施するならば教師たちは協力するという条件で、二年目からは学生が実行委員を務めることになった」と聞かされたという。（田中 2013, p. 2）すなわち、2010 年か

ら学生たち（ヤギェロン大学）中心の運営が始まったことになる。しかし、田中自身が2011年（アダム・ミツケヴィチ大学学生担当）と2012年（ヤギェロン大学学生担当）の日本語ブロックの「コーディネートを担当」（田中2013, p.5）したように、日本語の授業に関しては日本語教師がコーディネートを続けていた。田中の報告で注目すべきは、アンケート調査等から、修士課程の学生たちの日本語の授業に対する関心が著しく低いことが明らかになったため、そのレベルの日本語の授業の存在意義の見直し、ひいては修士課程の学生にはむしろ日本語の授業を主体的に行わせることを提案している点である。（田中2013, p.6）

後述するように、筆者は2011年の日本学国際合宿に初めて参加したが、その後は2024年にオンライン視聴をするまでかかわってこなかった。唯一2018年に筆者の所属先アダム・ミツケヴィチ大学の学生サークルが合宿を主催した時のことを、参加した同僚の生島真穂から詳しく聞いている。それによると、その年は日本語の授業についても学生がコーディネートをし、教師は運営には一切かかわらなかったという。ただし、日本語の授業は講義に対してワークショップという枠で扱われていたらしい。（Gasshuku 2018, <https://creativa.home.amu.edu.pl/gasshuku-2018/>）

2020年から2023年にかけて、コロナ禍により日本学国際合宿は実施されなかった。

2024年には、トルンにあるコペルニクス大学の学生サークルの主催で合宿が再開された。筆者は参加する予定で参加者向けフェイスブックのグループに登録していたが、直前の発病で対面参加はならなかった代わりに、はじめての試みの合宿Zoom実況中継によって、現地の様子を垣間見ることができた。再開した日本語ブロックのコーディネートを担当したコペルニクス大学教官瀬口利一氏によると、中断により、先輩から引き継がれてきた学生運営のノウハウが失われ、また大学間の横の繋がりも途絶えていたため、大変苦勞したということである。それでも、前述の実況中継や、授業への参加者を運営側が決めるのではなくフォームによる登録制にするなど、コロナ後ならではの新たな試みがいくつか見られた。ただし、実況中継は視聴者がわずかであり、あるいは教師のアイデアであったせい、2025年には継続されなかった。

筆者が14年ぶりに参加した2025年の日本学国際合宿は、再度アダム・ミツケヴィチ大学の日本学学生サークルが主催した。そのモットーは「学生が学生のために」であり、学生が主体的に運営する行事であることを再確認した。それに伴い、教師はあくまでも顧問として運営を支援する位置に立った。

日本語の授業についても学生がコーディネートする予定であったが、結局教師である筆者に、助言の要請に次いでサポートの要請があり、日本語関係のプログラムの調整・それぞれの授業へのサポーター教師の振り分けなどをサポートすることとなった。ただし、教師の運営への介入は最小限に留めるようにした。たとえば、日本語ブロックには日本語の授業の他に、日本人講師による講義まで割り当てられていたが、あえて同等に扱った。結果、2025年度のプログラムでは、講義・日本語の授業・ワークショップが区別されずに表記されることとなった。（Gasshuku 2025, <https://creativa-gasshuku.web.amu.edu.pl/program/>）

以上を含め、2024年度と比較すると、2025年度には以下の変化が見受けられた。

- ①学生主体の事業であることの確認。
- ②講義・日本語の授業・ワークショップの区別の撤廃。
- ③英語のみならず、日本語併記による事務連絡の復活。
- ④参加希望授業の登録制を改善（セッションの第1希望のみならず、第2希望以下も記入可能にし

て人数調整が可能に)。

- ⑤運営委員の新企画:合宿全期間・全参加者を対象とするゲームの実施。
- ⑥パネルディスカッション(言語学、文学)の新設。
- ⑦ペーパーレス(QRコードの多用)。

以上のうち、筆者の知る限りでは、教師の助言が影響したと思われる変化は③と⑦のみである。

学生主体で運営された合宿は、技術面で完璧とは言い難く、また上記の変化については教師の間で賛否両論がある。しかし、運営委員が事後に行ったアンケート調査の結果、参加者の満足度は高かったと聞いている。ただし、回答率も回答の詳細も公開されておらず、田中 2013 の報告と比較することは困難なのが現状である。

3. 筆者の日本学国際合宿への参加履歴

筆者が日本学国際合宿においてかかわった授業は以下のとおりである。

2011 年

- ①ジョンデクなぎさ「アイスブレイキング(インタビューゲーム)」
1 年生向け、インタビューゲーム。サポーター4 人、内教師 2 人、日本人留学生 2 人。(ジョンデク 2011)
- ②共同企画
生島真穂、ジョンデクなぎさ「日本のマナー」
1 年生向け、挨拶の言葉、訪問、お風呂の入り方。サポーター6 人、内教師 1 人、日本人留学生 2 人、博士課程の学生 3 人。(生島 2011)
- ③サポーター、協力者
塚崎巖「日本語の視点」サポーター3 人の内。
中西恭子「盆踊り」の日本人協力者多数の内。(田中 2013, p. 4)

2024 年

ジョンデクなぎさ「日本の遊び」で参加予定が、急病のため欠席。オンライン視聴のみ。

2025 年

- ④ジョンデクなぎさ他「日本の遊び」
茶摘みの歌と手遊び、N4・N5 向け。サポーター4 人、内学生 2 人、教師 1 人、教師の子 1 人。(ジョンデク他 2025a)
- ⑤顧問
アダム・ミツキェヴィチ大学学生「盆踊り」
全レベル対象、代表学生 2 人、サポーター学生 4 人(踊り 2 人、技術 2 人)、リハーサル協力 8 人(日本人教師 4 人、日本人留学生 2 人(ポーランドとドイツ)、ポーランド人教師 1 人とその子 1 人)。(ジョンデク 2025b)

4. 日本学国際合宿の授業の企画・実施における学生の主体度

表 1 は、「3.」で挙げた、日本学国際合宿において筆者のかかわった授業の企画・実施における学生の主体度を考察するためにまとめたものである。緑の太文字のところが学生が主体的にかかわった部分を示している。

表 1. 日本学国際合宿の授業の企画・実施における学生の主体度

実施年, 代表者, 「タイトル」	2011, ジョンデ ク, 「アイスプレ イキング (イン タビューゲー ム)」	2011, 生島, ジ ョンデク, 「マナ ー」	2011, 中西恭子, 「盆踊り」	2025, ジョンデ ク, 「日本の遊 び: 茶摘みの歌 と手遊び」	2025, アダム・ ミツケヴィチ 大学学生, 「盆踊 り」
アイデア	代表教師	代表教師	代表教師	代表教師, 学生	顧問, 学生
教案作成	代表教師	代表教師	代表教師	代表教師, 学生	顧問, 学生
準備 (スケジュー ール, 教材作成, 練習, 会場の準 備, アンケート の作成)	代表教師	代表教師	代表教師	代表教師, 学生	顧問, 学生
リハーサル	なし	代表教師, サポ ーター	代表教師, サポ ーター, 日本人 協力者	教師と学生各自 が練習	学生, 日本人他 協力者
実施	代表教師, サポ ーター (教師と 日本人留学生)	代表教師, サポ ーター (教師, 日本人留学生, 博士課程の学 生)	代表教師, サポ ーター, 日本人 協力者	代表教師, 学生, サポーター (教 師, 教師の子)	学生
反省 (参加者へ のアンケートの 実施と反省)	代表教師とサポ ーター (教師と 日本人留学生)	代表教師	?, 日本語の授 業コーディネー ター	代表教師	顧問
報告	代表教師, 日本 語の授業コーデ ィネーター (田 中 2013)	代表教師, 日本 語の授業コーデ ィネーター (田 中 2013)	?, 日本語の授 業コーディネー ター (田中 2013)	[未提出]	顧問 (参加者向 けフェイスブッ クのグループに て)

5. 考察と今後の課題

以上に見てきたように、ポーランドの日本学国際合宿は「学生が学生のために」主体的に運営することを目指して変化を遂げてきた事業であり、個々の授業を見ても、筆者がかかわった授業については、2011年には教師中心に企画・実施していたものが、2025年には、教案作成から実施に至るまで、学生の主体的な参加の度合いを増してきたと言える。しかしながら、根本的なアイデアの形成、日本語による教案と報告書の作成などにおいて、いまだに教師が介入し過ぎるきらいがある。

授業を学生自身が作れば作るほど主体性や社会性が育まれるだけでなく、達成感や自信に繋がり、あるいは学生のニーズの反映や実施者への共感から、授業に参加する学生の満足度や評価も高まることが考えられる。したがって、教師は可能な限りファシリテーターとしてのみ介入することが望ましいと考える。今後の研究においては、それを実証する詳しい調査と分析を行いたい。

一方、すでに学生が自立して行っている研究発表や着付けのワークショップなどにおいては、授業をポーランド語ないし英語で実施しているため、学生の主体性がより発揮されていることが考えられる。しかしながら、日本学国際合宿という貴重な場において、日本語の運用と日本語話者との交流の機会が限られたものになってしまうのは残念に思われる。当事業における日本語の授業の位置づけについて、より議論を深めていく必要がある。

謝辞

本稿の作成にあたり、筆者の質問に対して貴重なご意見や情報をご提供くださった瀬口利一氏、生島真穂氏に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 生島 真穂 (2011) 『クラス1 マナー』(教案草稿のコピー, 未公開ワード文書, 2011年5月8日 17:56:52 更新).
- 瓜生 佳代, シュチェフラ アレキサンドラ, マイヤー スタニスワフ, チャスカ アンナ (2010) 「ポーランド、スロバキア、チェコの日本学科合同合宿の試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第6号, 157-163. 国際交流基金リポジトリ, 2017年公開, <https://jpf.repo.nii.ac.jp/records/84> (2026年3月20日最終閲覧).
- ジョンデク なぎさ (2011) 『教案実施報告書ジェルクフ国際合宿クラス1 : アイスブレイキング (インタビューゲーム)』(未公開ワード文書, 2011年6月1日 1:34:46 更新).
- [ジョンデク なぎさ] Rząddek N., Kuźniarz M., Mann L., Kihara M. (2025a) 『日本の遊び : 茶摘み (ちゃつみ) の歌と手遊び Chatsumi (zbieranie herbaty): Piosenka i zabawa z klaskaniem』(教案, 未公開ワード文書, 2025年3月27日 7:17:24 更新).
- ジョンデク なぎさ (2025b) 『授業報告 : 盆踊り Bon odori』(未公開ワード文書, 2025年4月28日 13:33:22 更新).
- 田中 香織 (2013) 「国際日本学学生ワークショップにおける日本語授業」『日本語教育連絡会議論文集』Vol. 25, 1-6. 日本語教育連絡会議オフィシャルホームページ, <https://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun25.html> (2026年3月20日最終閲覧).
- Gasshuku 2018, <https://creativa.home.amu.edu.pl/gasshuku-2018/> (2025年8月20日最終閲覧, 2026年3月20日現在閲覧不可).
- Gasshuku 2025, <https://creativa-gasshuku.web.amu.edu.pl/> (2026年3月20日最終閲覧).